

上野英信 『黒い朝』

坂口博

広島・宇品の陸軍船舶司令部（通称・曉部隊）にいたときに被爆した上野英信に、原爆だけを描いた作品はないといってもよい。

本誌第7号で紹介した散文詩「田園交響曲」（57・2）が、被爆に触れた唯一の創作作品かも知れない。ただ、その解題でも言及したように、「黒い朝」（「サークル村」創刊号、58・9）という短篇小説がある。作者自身は、初めて収録した『上野英信集1 話の坑口』（径書房、85・2）の「あとがき」で「アナ埋め用として書きなぐったもの」としながらも、「私は「黒い朝」の私として生きるほかはなくなつたのである。この世とも、あの世とも見定めつかない世界に投げだされて、その私が拾わされることになつた「記録」という名の不可思議な物質は、いったい骨なのだろうか、それとも石炭なのだろうか……」と解説する。

坑夫の「わたし」は、夜明け前の昇坑となる。二交代か三交代かの勤務形態は不明だが、いずれにせよ深夜労働のあと「生きて地上にあがってきた自分の肉体を確認し、痺れるほどの幸福に魂をぬらす」のだった。それも束の間、「わたし」は出てきたばかりの坑口も、帰っていく坑夫長屋も何も無い荒涼とした場面へ置かれるのだった。

あたりは一面の骸骨の原である。陰毛のような草のはえた湿

地に、ありとあらゆる種類の人骨が、足のふみ場もないほど散乱しているのだ。それも、わたしのまわりだけではない。暗くてさだかには見わけられないが、微かに蛍光を放つて燃えているのが骨であるとすれば、ここは見わたすかぎり、人骨の原である。逃げ出すために駆け出そうとしたとき、（ウツヅ トマレ！）（セキタンヲヒロエ！）という「暗闇の奥」からの声に命じられ、石炭を拾おうとする。自家燃料用に道具袋に入れて、坑内から持ってきたものが、こぼれ落ちていたのだった。

しかし、その作業に対して命令は続く。（ホネヲヒロウナ セキタンヲヒロエ！）。「わたし」に骨と見えるものが「セキタン」らしい。仕方なしに人骨を拾うのだが、それは「つめてもつめても、袋はいっこうにいっぱいにはならなかつた」。

このあとも夢幻的な物語は続く。「誰にも劣らぬ善良な人間であり、親孝行な子であり、よき夫・父・友であり、まじめな労働者」の「わたし」（この表現は、作者「わたし」という読解を拒む意図を含む）が、なぜ「このような地獄にもまさる理不尽な修羅に投げこまれてしまったのか」は、わからない。「悲しみと憤りに肝を裂きちぎられた。わからない。どう考えてみてもわからない。なぜ生きながらこんな苦しみにあわされるのか……」。

さて、この声の主は何だろうか。「監視哨の望楼」があり「無数のサーチライトと銃口、スピーカー、望遠レンズによって構成された一分の誤差もない焦点」に釘づけされた「わたし」へ、直接「神経に伝わる無線電波」とは、何の比喩なのか。

英信は「田園交響曲」で、炭坑を「ここが俺の広島だ、と旗に誓つた。男は、ここで俺は俺の広島を生きているのだ、と決心した」

という「決意表明」をしている。似た表現は、ルポルタージュ「裂」（日本機関紙協会九州支部「支部報」第314号、58・8）にも見える。長崎県松浦市にあった江口炭鉱で一九五八年五月七日に起きた、二十九名が犠牲になった水没事故に取材したものである（このルポは、「月刊炭労」九月号、「サークル村」一〇月号にも転載・再録されるが、その経緯については触れない。『日本陥没期』Ⅱ未来社、61・10Ⅱ収録が初刊）。

傍の壁に、遺体搬出作業員の写した事故現場の写真が貼られている。累々と折り重なって倒れている犠牲者たちの、見るも無惨な腐爛死体の群、むなしく見開かれた白い眼球、溶けてくずれた唇と、むぎだした歯、かびの生えた胸や腹、無気味なまでに屈折した手、ふくれあがった睾丸……。

「まるでヒロシマだ」

同行した日本機関紙協会共同デスクの人たちが、呻くようにつぶやいた。そう、ヒロシマだ。まさに地底のヒロシマだ。この七月末のルポで、英信は自身が被爆者であることは触れない。ただ、炭鉱や一部関係者のあいだでは、当時はかなり知られていた。それは、一九五五年九月二四日付の日本共産党機関紙「アカハタ」掲載の記事の影響が大きい。「せんぷりせんじが笑った」の作者上野英信氏は、原子病が悪化し、休養加療しなければならなくなつた。上野氏は徴兵で広島に配属中原爆をうけて負傷、生命だけはたすかり、終戦後炭鉱労働者として働らき、労働者の文学運動にけん身してきた。「せんぷりせんじ」を書いたのち、筑豊の伝説をあつかつた「ひとくわぼり」を完成、「福岡県遠賀郡水巻町の」日炭高松の青年像をえがいた「ここに生きる」にとり

かかつたとたんに、医師から絶対安静を命ぜられるにいたつた。（中略）上野氏は失業中で生活にも困つていたので、地元の人たちは、多くの人の援助をのぞんでいる」（『炭鉱長屋』第1号Ⅱ56・1Ⅱより引用）と、当時はまだ無名に近い「労働者作家」を、かなり詳しく紹介していた。

『炭鉱長屋』誌上には、「えがたい労働者作家 上野英信を救え！」というキャンペーンが各地で始まつたことも窺える。日炭高松では、千田梅二の「板画個展」によるカンパ活動、東京における作家主体の救援運動「せんぷりせんじが笑った」の作者を守る会である。発起人には、阿部知二・安部公房・大田洋子・亀井勝一郎・佐多稲子・武田泰淳・中野重治・野間宏・火野葦平・堀田善衛・真鍋呉夫・由起しげ子が名を連ねている（第2号Ⅱ56・2Ⅱより）から、必ずしも共産党系の作家だけの活動ではない。

こうした経緯を考慮すれば、同行者が先に発言したようになっている「まるでヒロシマだ」は、英信の直観である可能性が高い。そして、問題は炭鉱事故と広島原爆の犠牲者が似ていることにあるのではない（屍体写真の比較検討など無意味だ）。そのように、原爆をおのが身に引き受けることで、炭鉱で生きていこうとした人間がいたことだ。これは、生涯を貫く課題となつた。

なお、いつも健康を悪化させていたという「夏」の軌跡を、「年譜」（『追悼 上野英信』89・11）からあらためて拾ってみよう。

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島上空に原爆炸裂。爆心地より三・五キロメートルの地点で被爆。直ちに被災者の救護活動にあたる。以後、白血球の減少、慢性脾腫等の原爆後遺症に悩まされることとなる。

一九五二年 十月、原爆症療養のため五年振りに「生まれ故郷の山口県」阿知須へ帰る。十一月下旬、体調回復し筑豊へ戻る。

一九五五年 例年夏になると体力が低下するがこの年は特にひどく、九月下旬から阿知須へ帰つて療養。炭鉱の仲間や友人達から、激励やカンパが多く寄せられる。

一九五九年 夏、健康状態悪化のため「サークル村」事務局を離れ、福岡市茶園谷（現六本松）へ転居。

一九五五年一二月から翌年一月末までの短期間、嘉穂郡二瀬町相田（現飯塚市）の炭鉱の谷に住んだが、ここを去つたのも健康状態によるようだ。「原子病は一進一退。ことに相田炭坑地帯での生活で、更に悪化の状態である」と、「炭鉱長屋」は伝える。この相田の体験は、英信のその後に大きな影響を与えた。それまでの大炭鉱の恵まれた労働・生活条件とは、比較にならない小炭鉱の状態を具体的に聞き出すことで、『追われゆく坑夫たち』などに結実する方向が定まる。まさに「俺の広島を生きる」こととなった。

「田園交響曲」「裂」「黒い朝」から十年後の、原爆に触れた文章も、「声の主」を考えるために参照しよう。

あえて誤解を恐れず告白するが、この二十三年間、私はアメリカ人をひとり残らず殺してしまいたい、という暗い情念にとらわれつづけてきた。学徒召集中のことだが、広島で原爆を受けたその日以来、この気持はまったく変わらない。おそらく、死ぬまでこの情念から解放されることはあるまい。

人はよく原爆症のほうは、と私にたずねる。が、私にとつてどんな肉体的な障害の苦しみよりも大きいのは、この暗い情念から逃れることのできない苦痛である。これこそ、もつ

とも悪質で致命的な原爆症というべきかもしれない。もちろん私とて、このような呪われた状態のまま斃死したくはない。なんとかして一日も早くこの苦しみから自由になりたいし、健康と光明をとりもどしたい。しかし、いつか、この絶望的な症状は私の骨のずいまで侵蝕してしまうだろうという不吉な予感が、たえず私を怯えさせる。

「私の原爆症」という、刊行書で三頁ばかりの短文である。「展望」一九六八年一〇月号に発表後、評論集『骨を噛む』（大和書房、73・4）に収録。『上野英信集5 長恨の賦』（86・5）や『戦後文学エッセイ選12 上野英信集』（影書房、06・2）にも再録された代表的な文章である。

おそらく「暗い情念」と「声」の出所は同一である。宇品で被爆しただけではない。詳しくは語らないが、「年譜」にあるように、兵士として「直ちに被災者の救護活動」に従事したことの体験が、身心ともに、かなり大きな影響を与えている。炭鉱事故の救護活動から受けた「地底のヒロシマ」という認識の背景は、そこにある。サーチライトや望遠レンズによって焦点化され釘づけされた「わたし」は、炭鉱労働者文学の旗手として脚光を浴びていた英信自身にも重なる。そこから、どこへ脱出していくか。その手探りの模索は続く。ウニのように突き出た鋭い棘（骨）で全身を覆われた「醜悪な形の生きもの」へ変身してしまいうような怖れ。

もう一度「私の原爆症」に戻ろう。下手にまとめるよりも英信に語らせるほうがいい。

アメリカ人を皆殺しにしたいという、ついに果たされることのない情念に私がとらわれているのを知られる恐れからであ

る。(中略) 私自身、正直なところ、死にたいほど自己嫌悪におちいつているのだ。しかし、どんな美しい思想も、建設的な平和の理論も、私をこの陋劣な苦しみから解き放つてくれない。鋭い放射能の熱線が一瞬にして石畳に焼きつけた人影のように、この黒い影も私から消え去ることはないのである。ひよっとしたら、生きているのは私ではなく、その黒い影だけかもしれぬ。(中略) 私はいまなお一度目を許すことができないのである。誰がなんといおうと、ぜつたいにあの一度目を許せないのである。さらにいえば、誰かのせりふめくが、それを許す私を許せないのである。

呪縛というべきか、自縛というべきか、いづれにせよ、この救いがたい、われながら浅ましい妄念そのものを原点として、私は平和を考えるほかないのである。(中略) そして無限の虚無の底からふきあがってくる殺意だけが、かろうじて私を慰める。もとよりそれは憎悪でもなければ、憤怒でもない。しいていえば、しよせん救われることのない哀しみと呼ぶばかりはないものかもしれない。

満洲の建国大学に学んだ英信は、「殺意」の視線が、また戦地や占領地下の中国人、植民地下や「内地」の朝鮮人をはじめ、多くのアジアの民衆から日本人に向けられたものと、構造的に同じであることを、知識としても体験としても知っていた。そのことを自明の前提として、先の「平和論」は組み立てられる。したがって、「私は永劫に救われることのない奈落の底にあって、わが殺意のやいばが、われとわが身を切りきざむ熱さにたえるほかはない」と結論される。

「無限の虚無の底から」の情念、(ホネヲヒロウナ セキタン ヲヒロエ!) という声にしたがう哀しみ。それは、「悲しいばい／なしか知らんが悲しいばい／たつたそんだけで悲しいばい」と歌った詩「おとぎ話」(「地下戦線」第1号|| 53・5||に青木信美の別名で発表)にも通じている。その詩は「おとぎ話たい／／悲しいばい／おとぎ話にしたち／なしかやつばい悲しいばい／他人ごとやないけたい」と続く。短篇「黒い朝」も寓話、一つのおとぎ話であった。そして、「私の原爆症」に共通する「黒」と「骨」のイメージは、樹木が好きだったという英信の次の挿話にも触れておかねばなるまい。自宅近辺の住宅団地の周囲に、並木として植えられた「夾竹桃」の話。

これも背の高くなる木で父好みかと思つたら、意外にも父は渋い顔をした。

「ぼくは、夾竹桃は、見たくない」

一九四五年八月、広島原子野にそれだけが咲いていたという夾竹桃の赤い花。木を植えた人が唯一目をそむけた木であった。上野朱『父を焼く―上野英信と筑豊―』(岩波書店、10・8)の「八月の花」に描かれた晩年の姿だ。赤いカンナを印象に残した被爆者もいた。焼け焦げた黒い光景に、赤はさぞかし鮮烈だったに違いない。

上野英信の全作品を、広義の「原爆文学」として考えていくことが、わたしたちに可能だろうか。それは、原爆後の人間でなければ、成し遂げることができなかった仕事なのかも知れない。少なくとも、一人の被爆者が、「アメリカ人を皆殺しにしたい」という「暗い情念」をかかえながら、その安易な解決を宗教的にも政治的にも求めずに生きた、文学の証として読むことはできよう。